感謝のことば

はじめに、ヒトの身体を解剖させて頂くという貴重な機会を、私たちに与えてくださったご遺体の先生、ご遺族の皆様、そして白菊会をはじめ実習を支えてくださった全ての方々に感謝申し上げます。

私たちは解剖実習に臨むにあたり、「ご遺体の先生は、学生にとって最初の患者である」、ということを繰り返し言われます。「ご遺体の先生」という人生で初めて聞く表現や、まだたいして医学を学んでいない自分達にとって「最初の患者である」という説明には戸惑いを感じました。しかし、解剖実習はこれまでの授業とは何かが決定的に違うのだろう、と感じたことはよく覚えています。

ご遺体の先生は、本当に多くのことを私たちに教えて下さりました。
教科書で学ぶとヒトの身体は全部同じように描かれますが、顔が人によって違うように、臓器もご遺体の先生によってまったく違う姿を見せてくれました。ヒトの体には、構造や形態の多様性があり、全てが教科書通りではありません。もちろんご病気により異常な構造や形態となってしまった場合もあります。そのような構造を見るたびに、これは、個人差なのか、病気なのか、それとも、自分が不勉強なだけなのか、毎日、頭を悩ませました。
ご遺体の先生が教えてくださったことは、それだけではありません。ただ私たちを信じて身体を預けてくださったという行為は、ヒトの体を扱うことに対する責任の重さ、要求される姿勢や倫理観といった、医師になるために必要な心構えのようなものに気づかせてくださいました。

実習の日は、最初と最後に必ずご遺体の先生に対して黙祷をします。この時間は、私にとってご遺体の先生の期待に応えることを誓う一種の儀式の時間でした。その時間に、いつも思い返す言葉があります。

「書かれた医学は過去の医学であり、目前に悩む患者の中に明日の医学の教科書の中身がある。」、という言葉です。医学は、教科書から学ぶだけでなく、目の前の患者からも学び続けるのです。ご遺体の先生は、私にとって、まさに「最初の患者」でした。今後、医学を学ぶとともに、「未来の医学」たる、目の前の患者さんに真摯に向き合い続けることを約束いたします。

実習が終わり、長い間お借りしていたお体をご家族のもとへお帰しすることができます。たとえご本人が献体を望んだとしても、抵抗のあったご家族も当然いらっしゃったと思います。ご遺体の先生のお体を私たちのためにお預けくださったこと、心から感謝申し上げます。実習が終わって振り返ると、「ご遺体の先生」、という表現はまさにその通りでした。お名前も、どのような人だったのかも知ることはありませんでしたが、実習を通してご遺体の先生に教わったことは、これからも、私の心の中にずっと残ることと思います。

長い間、本当にありがとうございました。

令和 5 年 6 月 3 日　医学部 三年生代表